



麻のれん

試し読み

なもなきかたりや

桂文吾 江都え下り上方咄の封切をなし初代（朝寝坊）むらくとの両国の席上をつとむ 大道具せり上はなし二長たり

（『本朝話者系図』）

いやだなあ、と栄助は思った。

「私も先代にはたいへんに世話になりました。私ら野育ちのほんま鼻垂れやしような子らを大事に育ててくれはって、やりたい言うたら出店まかしてくれて、のれん分けまでよう面倒見てくれた。出来たお人やった、恩返しせな罰が当たるといまでも思っております」

「……」

せやから、と表情も変えず続ける。

「坊ちゃんも大事にお預かりして、はよ一人前になつてもらいたいと思っておりますが」

一人前も何も栄助には商いで身を立てようとか暖簾を継いだりする気もない。異国船を発端とする薩摩や長州、幕府とで諍いは険悪になる一方で攘夷浪士だのと市井を脅かしているようにしか見えない荒つぽそやなのもちらほら見るからだ。

「堪忍してください、無理です」

そのように実家には文を届けてあり、主からの許しも得てい

る、と。

言われてしまった。上座に座る主人に頭を下げさせるなんてどういう了簡だと草葉の陰で嘆かれるところだろうが、さいですね、と応えるしかない。

どうも膝の上の尻っぺたの座りが落ち着かないのだが、あい、と応じる。

栄助は実家が好きではないというわけではない。外腹の子ではあつたが、年が離れていることもあつてか、兄二人に手をかけられ、甘やかされて育つた。

だから戻れば戻るで嫁の世話をされるのだろうと思うと気が重たくなるものの、嫁と暮らしていくにはおれには何が向いているんだろ、なんて日々のたつきに掛かる金の勘定までしたりしてとりあえずの蓄えなんてのも考えたりしてしまう。お店のことも大概は覚えてしまった。なまじ学をつけさせられたりするとろくなことをしない、かといって腕つぶしもないけども。米相場の話を聞くのは飽きないけれど、米が不足してそれどころではない話になっている。そこへ算盤を弾きすぎると疎ましがられるし、あんまり信用もされない。堺は米の町だろうと思わないこともないが、栄助は信用を支える店の名前はあれど、見て呉れからだろうか、かもにされそうな素人に見られていた。覇気のなさ、そのぼーとするくせを直せれば、と親も兄たちも頭を悩ませた。

気味助と上方でも呼ばれたりする、…からだろうか。

おれはぼーっとしてるのかねえ、とよく思ってしまうほど自覚がないから栄助もくせを直せない。尤もそれは幼い時分から

で、医者にも何度も診せたことがあるそうだ、髭を生やした小石川の医者はどこも悪いところは無いし、あるとすれば主らの心根の方である、と追い返したそうだ。それはそれで正しいのではなからうか、栄助は大病をしたことがない。

江戸にいても、と出店修行に赴いたが、さりとて出店は丁稚からこつこつと長くきちんと働いた者に任せるべきで、栄助の出る幕はない。さてでは江戸でも大坂でもどちらでもいいではないかと思うのだが、これがよくない。何が良くないのか。

「さいわいに坊ちゃんも学問もして算盤も得手だし、唄もいい。客あしらいなんかも先代譲りの才がおありだ。旦那衆から覚えも良いのだからどこでもきつとうまくやれます」

持ち上げられているのだから気が持ち上がった気にならない。「ですが、お変わりになるの兆しもなく、手前共もどうすればよいか分かりません」

それで窺ってしまうという栄助は困ってしまふ。まあ、いつ蔵を壊されるか気が気じゃない日々、金をと浪士達から絞られるのではたまつたものじゃないだろう。しおどき、という言葉はある。

どっこい腰は重い。甘やかされたからとか、単なる物臭というのでもない。

「…嫌だなあ…」

指折り数えて何が嫌なのか考えてみる。居心地も良かった明るい商人の町もどこかおつかない匂いがする、それは江戸もそうだろう、むしろ戦場になるかもしれない。だが京でもやつとあの事件があった。

「おれがいたいのほどこなんだろな」
天井を向いて言ってみた。

「ええい、お前なんぞ親でも子でもないわ。さつさと家を出て、何処へでも行け」

「言われなくとも、こんな家」

ふんつと、親子喧嘩は睨み合つての罵り相撲の果てにはこのような売り言葉と買い言葉で行司いらすの締めを迎えたりする。

ところが栄助はそうではなかった。

「お前さんはあれをこれをとやらせればひと通りこなせるがね、だがしかし、どうもコウ…熱意がないトサ」

「ふうん…そうなん」

「うん。太閤様以来の商人の町つてんで、根っこから学んでこいつてんでナ」

「…」

おさのはさつさと身支度を調えると解れ髪に手を遣る。この仕草が色気があっていい。愛想も良く、寄席であれこれと立ち回っている小柄な姿は忙しく、これもまアおさの目当ての客がいることも知っていたが、同じお茶子達と話しているのを見ると野に小花が咲いているくらいにしか思えない。ところが床で帯を解くとおさのという花のよさが分かるのだ。栄助はおさのとそういう間柄になるつもりはなかった、相手もそうだろう、態度が変わることもなければ怪気された覚えも栄助にはない。

た像が鮮明になる薬を掛け、また洗う。そして像が劣化しない溶液をかけて火で焙り乾かす。

これで「原板」が出来上がりだ。裏に黒い紙などをつけて像を見やすくし、箱に入れる。

この玻璃板だけで良ければ、光を当てた方に黒い布などを当てて、本来見えているはずの姿でお渡しする。更に人数分の紙に像を写しとる場合は時間が掛かるため、後日こちらから届けに行くことになる。

写真師は出来上がったばかりの写真を手にも、客人が待つ座敷へ歩いていった。

「こちらでございます」

茶菓を出されて一息吐いていたと思しき女性たちに見せると、ほうと驚きと感心したような溜め息を洩らした。

「まこと不思議な」

「今にも触れそうじゃ」

「母上……？」

一緒に写った少女が、ガラス板に写る母と、隣にいる母を見比べて不思議そうに呟いた。

「左様ですよ」

幼い娘にそう答えて、ふふふ、と笑った。

女性たちは絹に豪華な模様が入った着物を着ている。言葉遣いと合わせても、恐らく大身の奥方たちだろう。ともすれば「魂が抜かれる」などとも言われる写真、つまりは最新の西洋科学技術に馴染みがあっても不思議ではない。もちろん、主人である武士の立場により、到底受け入れられない、と言う人たちも

いるはずだ。

加えて、一時よりは値が下がったとは言え、未だに写真撮影は金が掛かる。急に思い立ったからと言って、そう気軽に撮れるものではない。

「伺ったときは斯様なことが出来るのかと思うておりました
が……」

「これを紙に写すことも出来ませんが、いかが致しますか」

写真師は見本として作っておいた、女性や武士、風景を紙に写したものを数枚見せる。

「なりません」

少女が紙の写真に興味津々で手を伸ばすのを、母が慌てて止めた。

「構いませんよ。どうぞお手にとってご覧ください」

その言葉にホツとしたのか、娘を止める手が緩んだせいか、少女が嬉々として写真を手にとった。紙に感光材料を塗布したもので、原板の天地左右が反対に写った『消極像影』^{ネガチフベールト}を『積極像影』^{ポジチフベールト}として、つまりは更に反対に写しとり、本来見えている姿にしたものだ。

女たちも恐る恐る写真が映った紙を手に取り、ためつ眇めつしていた。

「姉上、私も一枚手元に欲しゅうございます」

女性がもう一人を姉と呼び、頼む。

「コレ。紙に写さば、これはどうなるな？ 消えてしまうのではないか？」

姉と呼ばれた女性が自分たちが映った玻璃の原板を指差す。

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)